
変動する世界秩序の中の農村社会

(第八回農村社会学世界会議への会長講演)

ジャンパオロ・カテッリ

(Giampaolo Catelli, Catana University and Catholic University of Piacenza (Italy), President, International Rural Sociology Association.)

一九九二年八月一二日 Pennsylvania State University, University Park, Pennsylvania USA.

本日、一九九二年八月一二日に国際農村社会学会 (IRSA) の第八回農村社会学世界会議が開かれることはまことに意義あることと

いなければならない。五世紀前の一四九二年に、私の国の同胞、Christopher Columbus が新世界を発見するため三隻の小さな船で西に向かつて出帆した。彼の発見は世界の秩序を大きく変化させた。それから丁度五世紀の後の現在、世界秩序は再び広範な変化を遂げた。農村社会学の分野でも、われわれはこの世界会議で祝福し、活性化するために集まっているが、世界のすべての人々の間にもっと包括的な連帯性を保証するような種々の人間の社会組織の研究に従事してきた。

この会議は Pennsylvania で開かれているが、その位置は、Quakers 教とそのリーダーである、William Penn が自由を求めて定住し、Penn の "Sylvania" (それは Penn の森 "forest" を意味する) でコミュニティをつくった移民に与えられた意味にたいする豊かなアメリカの歴史のシンボルを思い起こす。この歴史と、現在、地球を席巻しつつある記念すべき変化とは、この第八回農村社会学世界会議をして農村社会学の分野の発展にもっとも重要なそして刺激的なイベントとさせることであろう。IRSA は四年に一度全世界の学者が参加して世界会議を開催する。本年の会議がコロンブスの航海とアメリカ発見とに符合することは二重の意味を持っている。

第一は、われわれの会議がペンシルバニアで開催されることは、この州がアメリカ合衆国の人々の歴史に親しまれているのみでなく、ヨーロッパと新世界の結びつきの証拠でもあることに意義がある。ペンシルバニアへの移民はヨーロッパの人々とその文化とをこの新世界の形成のためにもたらした。さらに、ペンシルバニアは Quakers の平和なそして非暴力的な文化と宗教的な不寛容さの故に他の国を追放された集団の移民の促進のシンボルである。それは正

確には、現在文明社会を規制する価値、アメリカの理想の基石となっている現世の civil 自由と寛容 tolerance のような価値が優勢となり、世界的に普及してきたことに意味を与えたのは William Penn と初期の the Quakers たちの聖なる実験の精神である。

第二の意味は、この会議のテーマである「変化する世界秩序の中の農村社会」と新世界の定住者たちの精神との結合である。今日われわれは、William Penn の「聖なる実験」の精神に見られる兄弟姉妹的愛情と連帯の理想に集中した、新しいそして普遍的な秩序にたいする深い変化と期待との兆候を数多く見ることができ。これらの初期のヨーロッパ人のペンシルバニアへの定住者たちの精神は、すべての人民に現世のそして宗教的な自由の裏打ちをし、民主主義の追求を鼓舞していることである。今日変化しつつある世界秩序は、全世界の人々のグループがそのオートノミーを要求しているように、これらの理想と連続する成果を示している。そしてそれはまた、定住者の精神に見られるように、すべての人々が平等な尊厳を共有しうるような新しい普遍的な形態の社会秩序を確立する必要性を示している。かくて今日出現しつつある世界秩序は、その新しい構造はまだ脆弱であるが、一部の人々への自由のみでなく、また個人の自由のみならず、すべての人民の自由すなわち地域や世界の支配に直面して国民的政府によって彼らの identity と文化を保持しようとする人種のグループ化やその他の人民のための自由をも含めて、もう一度、自由の探求に焦点を結んでいる。今日、人々が努力しているものは、丁度初期のペンシルバニアと同じように、彼らの人種的 ethnic な、そして文化的な identity に関する防衛 safe guard である。すべての identity に対する尊敬は、非常に多様な、人類の継

統的な存在に對する置き換えることのできない世襲財産 *Patrimony* として役立ち、多様なそして自律的な人民の間の関係の知識と質の連続する成長を保証することができる。

世界の人民は、それ故に、連帯を建設する新しい方途を探求している。この探求は必然的に、新しい型が古いものに直面したり、対立する *Interlines* が衝突したりするような問題を発生させる。そしてこのことは逆にすべての人々が平等な尊厳を与えられるような新しい秩序を発見する必要を高めてきている。拡大する民主主義の新しいフロンチアの上の自由の精神は今日、個人の自由の保証からすべての人民の自由と博愛と平等の保証へと広がっている。いまや終わろうとしている *millennium* (至福千年) は個人の自由を闘いとすることで大きな利益をもたらした。新しい *millennium* は、「人民」 *peoples* の自由に對するを獲得するための葛藤の時代となるであろう。この強調点の推移は農村社会学が直面しなければならぬ挑戦を表している。世界会議のテーマは、社会に於いて民主主義の建設の課題が未完成であり、未終了であり、それ故に将来追求されるべきものであることを示唆している。この挑戦の中心は、戦いとしてきた個人の自由を農村世界の人民 *Peoples* と呼ばれる集団へと拡大することである。

その課題が終わっていないことは、貧乏が世界の人口の三分の二を占めていること、自由と尊厳が大量の農村人口に否定されていること、世界の各地で農村人口の福祉が改善されているのなく、むしろ次第に悪くなっていること、現在、このような時代にあることは明瞭である。多くの国では、農業分野は政策によって無視されている。無視されていないところでも、農業コミュニティが次第により

大きい中心に依存を増す政策をとっているところは多い。多くの研究が示しているように、このような依存性を増すにつれて、農村コミュニティは経済問題に関してその意思決定の力を失い、社会政策の上で大きな不利益を被り、不利な立場におかれることも多い。経済発展のプロセスにおいて、いわば、農村人口は、その村落さえ失って、小屋は倒され、家族は保留地に群がる。合衆国の初期の発展において土着のアメリカ人たちが保留地を割り当てられたことと似ていなくはない。

驚くべきであるが、一九八〇年代初期以来このような農村の条件の悪化は、自然環境の再発見とそれに代わる農業の普及とに結びついた農村生活への関心が平行して成長してきた。これらの平行した傾向は、この時期には、重みと重要性とにおいてバランスをとって現れる。農村人口の無視と世界経済の強力な分野による農業の植民地化とは、新しい国際的秩序の交流を評価する点で考慮されるべき危機的な要因として現れている。しかしながら、さらに、農村性の保存、それに代わる農業、そして農村世界への生態学的圧力は、大部分は、一層発展した西側の諸国の一種の歴史的記憶の研究分野として限定された現象であった。この関心は、重要性を増しているけれども、まだ皮相的なもので、人々が現実生活に結びついてはいないが、まだ戦略的な事柄にはなっていないかった。

二〇世紀の終わりのこの十数年の間に多くの国に起こった政治構造の深刻な変化は農村世界における生活条件、殊に農業分野の危機的状况と直接にそして劇的に衝突する。われわれが立証しようとすることは、農村人口が蔓延する貧乏やその他の無視と搾取の結果によって悩まされている世界における新しい政治的秩序を探求すること

とである。変化する世界秩序は、また世界の環境の公害に結びついた重大な生態学的変異 *mutation* と論争しなければならない。さらに、経済的視点からは、新しい秩序の探求は農村生産物の価値の低下と流通や商業に従事する大企業の富や力の増加の時期に起こっている。これらの方途のすべてにおいて最近の事件は発展過程の否定的なそして無制限な傾向に衝撃を与え、加速している。それには、殊に国際的な会社の行動に示されているように、更新されたそして極端な資本主義の攻撃性が含まれ、有限の環境的資源の搾取の道を開くことに献身しているような一部の企業を含む新しい独占とその他の経済的複合企業 *conglomerations* をつくりだそうとする絶えざる動きを含んでいる。

この攻撃やその他の農村世界を悩ますイベントに直面して、現代文化はその方向感覚を喪失し、政策は良い世界を建設するよりも依存性を建設することに方向をとっているように見えるし、多くの国民のリーダー達は経済のコントロールのための新しい社会的規制を創造し、保持することが事実上不可能になっている。同様に、変化する社会は、貧弱な資源と僅かな成功の望みしかないが、事実上の社会病理の氾濫と家族やコミュニティ生活における広範なそして多様な無気力に対して闘わなければならない。さらに、その問題がエスカレートしていても、その強度はむしろ強くなっていくような大きな変化が農村人民の未来に対する新しいシナリオのデザインを示唆している。急速な変化は混乱と苦悩を生み出すが、希望をも生み出す。——その希望とは世界の諸般の中心的事情において飢え、貧困、麻薬、犯罪そして公害への戦争が軍事的戦争や経済的ヘゲモニーにとって代わるだろうという希望である。実際、変化する世界

秩序の挑戦が遭遇するならば、暴力的戦争はこれらの問題に対して闘われなければならない。

これらの変化が正当化する希望は、すべての人への自由と尊厳の追求を国民的レベルから国際的なレベルへと変形させていくプロセスに農村の人々を参加させることに主として現れるであろう。明らかに農村の人々は、丁度最近のイベントではこのような遥かな変化を引き起こしてきた主要な俳優 *actors* であったのと同じように、いたるところで未来への戦略に含まれなければならない。

実際、農村人口はこの広範な人口移動とそして様式とイデオロギーにおける全面的な変化の時代において重要な社会構造を与えている。すべての他のものが流動する状態の中で社会の構造に関して残存するのは家族、集団、町村 *boroughs*、コミュニティそして村落における日常の社会関係の構造である。——その社会関係は農村世界の基礎的な特徴によって古代から支持され *sustained*、未来へ伝搬される。さらに、遠い飛び地として孤立したり、純粹の遊牧地として社会から分離してはいない限り、高度に複雑化し、多様化した農村の文化とコミュニティの形態とは未来の社会に決定的な影響をもつであろう。

マルキシズムの *"rural idiomism"* は、都市生活の質と農村孤立化の影響を過大評価しているが、メリットもないし、支持できない。農村の人々の集団は相互に高度に相違している。彼らが接触する他の集団とは違っているが、そして農村空間への歴史的適応と特徴づけられるが、それらは独特の文化と価値をもっている。そしてそれは組織において豊かであり、未来の世界秩序に貢献する潜在能力は強い。同様に、多様化した農村の人民 *peoples* の存続については、

大衆社会においては農村の人民 *peasants* は、都市と農村の空間の深刻な構造的変化によって、過去から現在まで集団的統一性と価値への親近性を失ってきたという、今ではあまりはやらなくなった大衆社会における成長する斉一性の理論とは矛盾する。農村無視の傾向が進み、農村の人々が世界の経済と政治的システムに機能的に依存する傾向は増加しても、農村の多様化と農村社会構造は存続するのである。

この主題に関する一九七〇年代および一九八〇年代の経験的調査研究は、いかに農村と都市地域の接近とメトロポリタン地域のその後背地への侵入とがその家族やコミュニティ関係における農村の人々の多様性と基礎的社会慣行を本質的に変えなかったということを示してきた。農村生活はその中核部分は血縁やその他の連帯的關係の厚い網をもち続けてきた。産業社会でさえこの中核部分は福祉の保持に役立ち、機能的な依存性の成果を無気力化 *debilitating* する事に反対し、抵抗することに決定的な重要性を持っている。明らかに、誤解はほとんどないと思うが、農村の人々はどこにおいても経済的政治的力が弱まり、経済的政治的搾取の犠牲者になってきたことを認めなければならない。また、彼らは彼らがこうむる従属 *subjugation* と絶えざる損失にたいする見返りをほとんど受けとらないことも注意すべきである。そしてしかも、農村の人々は、種々な *identities* をもっているのに、同時に爆発しやすく、そして不安定な社会的潜在能力 *potential* を構成している。彼らは直接日常的に自然環境に接触している。彼らは所有物や隣人との協力の価値の運搬者でもある。彼らの面接的關係は、現実や社会生活へ人々のオリエンテーションが埋没される *being submerged* という点で事実上

近代化へ進むことはできないほど非常に構造的である。このような農村世界全体を事実上特徴づける強力な価値に加えて、ある人々が弱点と呼ぶような、忍耐、独特な間の取り方としての恒常性 *stability*、美や環境に対する自然の感覚としての謙遜 *modesty* というような価値をもっている。これらは農村の人民によって違うが、各々の集団化に独自性を与え、彼らの社会化 *socialization* の土台に横たわっている潜在的な構造を保護するのに役立つ。このような弱点としての価値は農村の人の心臓部であるし、農村生活変化の後光 *Falco* を形成する。

膨大なそして錯綜した国家間の政治的盟約のなかに途方にくれ、メトロポリタンな領域や大きく公害を受けた生態系に従属せしめられた農村空間に散らばっている何百万という人々に代わって、農村社会学は科学的合法性 *scientific legitimacy* と政治的社会的有用性 *utility* の研究を進めなければならない。一方では、農村社会学の分野の内外の農村社会の論点や問題を理解し、解決する為に、理論においても方法においても、従来のテクニカルな用具が適切であったか不適切であったかとい問題に取り組まなければならない。他方では、この分野は、農村社会学が関係する時代は終わったと示唆する人々の問題に直面し改めて追求しなければならない。その問題は応用分野の基礎についてのラジカルな再評価の問題を呼び起こすであろう。すなわち、農村社会学は存続し続けることができるのか？そして今日の都市的世界システムにおいてそれは存続し続けることができるのか？確かに、農村社会学者は存在するし、研究は、人々と農村的環境の間の関係のような、根本的な農村問題を探索し続けるであろうことは疑いがない。しかしわれわれをリードする分析は

どこにあるか、そしてそれは何に貢献できるものであろうか？

その研究分野は、丁度それが発展する事ができるように、消滅することもできるということ、農村擁護論のようなイデオロギーや農村福祉を前進させる科学の利用は消滅することができるということ、複雑性が増大すると運動が成熟し、衰退すること、そして理論や方法は、それらがポピュラーで有用であっても、退化を急ぎ、新しいアプローチの犠牲になって、結局は忘れ去られること——このようなことを歴史も社会学も警告してくれる。研究の分野や用具を展望する一つの方法は、社会学は、その分野が多様化し、応用においてもさらに有用となり、そのアプローチはタイムリに貢献し、やがて消えていくというように、無限に拡大しうるほど開かれているということである。もう一つのこれを展望する方法は、もっと批判的な議論であり、社会学の分野のアプローチはいずれかの理論、方法、または応用の戦略におけるコンセンサスに貢献することなく増殖すること、そして技術的な増殖 *proliferation* は平凡な *banality* と無用性を生ずることである。農村社会学ではどうであろうか？

何年もかかって集めた農村社会学研究の情報のうち何が残るであろうか？ 科学や社会に対するその有用性とは何であろうか？ その答はそのフィールドの発展とその組織の間の関係を調べることによってえられるであろう。規模の大きい、費用のかかる研究が新しい知識の獲得にのみ捧げられるという傾向はその研究の質を退化させることを認めなければならない。新しい方法や理論を作り出すことにとりつかれることよりもむしろ農村の人々の底に横たわっている構造を見いだすことに関心を向けるべきであろう。この基礎となる構造を理解することが目的となるとき、研究の多様性と限界性さえも

が真の意味の農村社会学の分野の存在と社会的価値を運んでくれるのである。別の言葉でいえば、農村社会学の真の貢献はその後の目的によってあまりにも容易に混乱されうるのである。

今日、農村社会学を含めた社会学全体が農村の人民 *peoples* の生活に焦点を結び、一層純粋な研究に集中することから遠ざかっていく傾向がある。恐らくはその分野は伝統的なイデオロジカルな抛り所を超えるものとなる。しかし、この分野のオリエンテーションにおけるプロセスや変動にどんな力や要因が真に純粋な社会学の建設を促進するのであろうか、また、応用社会学への新しい道を開くのであろうかという問題が残る。そして農村社会学は変動する世界秩序の挑戦を受けとめうるであろうかという問題もある。

農村社会学における新しいアプローチの発展は、過去における多くの研究を特徴づけてきた心の乏しい *mindless* 経験主義を超越すること、そして、われわれの仕事の目標としてきた単純な叙述やドキュメントを超えることが必要である。農村コミュニティの詳細な部分に集中することよりも、農村社会学は変化するコミュニティの中の集団と個人の間の相互作用を批判的にそして深く分析する事によって、自らを解放し、もっと有用とすることができよう。

この方向における一つの段階では、われわれが観察するように、われわれの理論が考えるより以上に社会は錯綜した実体として存在することを認めることが重要で有益である。社会システムとして描いてきたものが境界を超えて、社会とともに全体的実体を形成する幅広く未踏の「外部」*outgroup* が存在する。このより大きい全体における傾向は、一つの波が巨大な大洋に吸収されるのと同じように、社会の内的現実の中に吸収される。それ故、われわれの仕事は、

この一層大きい現実の諸型を探求し、解明するために社会システム
の表面を超えていくことである。

この仕事を実行するためには決定論的方法よりは確率的方法を用
いるなければならないと思う。相互作用主義理論が論ずるように、
確率主義的方法はこの複雑で絶えず変化する社会的現実を説明する
ことを許す唯一の方法であろう。われわれは社会関係において調和
する型を探求しなければならない。そしてこれらを識別することは
複雑なそして多次元の現実の中に存在する秩序を明らかにすること
であろう。

これらの型は、社会を規制する常数(変わらざるもの)であり、
コミュニティや集団が多く価値の中から裏打ちし、従って行くた
めに選んだものとして以外にはそれを基礎づける理由を決定するこ
とができないような、われわれの分析に帰せしめる不変の規範を反
映していると思う。確率的方法を用いることによって明らかにした
諸関係の構造はこの明らかにされた秩序に帰する。そしてこの秩序
の注意深い研究は、最初は完全に別個のものとしてのみ現れた埋没
した価値に導いてくれるであろう。

このアプローチとこの課題によって、社会を、われわれがまさに
今解読を始めたところの埋没されたコード(暗号 hidden codes)の
表現であるとみなすような純粹社会学の領域に入り込んでいくので
ある。実存するどのコミュニティも、どの集団も、どの個人も社会
関係へ参加する程度に応じてのみそうすることができる。社会関係
においては社会的コードはまず人間 persons に、ついで関係に、そ
して面識の経験において構成される。複雑な社会はこのコード、こ
の秘密のパターン、この謎 enigma を持っている。

最後に、その失われたアイデンティティを求めていかに農村社会
学を農村世界の人々の研究に引き戻すことができるかと問わなけれ
ばならない。その答は明瞭で、単純である。農村地域の人々を研究
することによって価値の相違を分析し、直面することができる。そ
してこれらの研究は人間関係の隠されたコードを解くことに導いて
くれるだろう。このようにして農村社会学の分野はそのアイデンティ
ティを再建することができる。

農村の人々は生きる力を構成している。彼らは環境と社会とをほ
んど結合している。そして彼らは伝統的文化と諸型の連続性とな
ドミナントな特徴を持つ社会的領域を構成する。農村の人民の生活
は自然の開発という論点から不可避的である。実際、農村の人民は
今日の変化する世界において新しい世界秩序の探求の道へわれわれ
を導いてくれることを要求しているという議論は道理がある。そ
れと平行して、彼らは、絶えず増加する政治的圧力によって本質に
おいて彼らに閉ざされている道を進まされている。農村の人民が変
化する世界の環境を展望しようとする冒険は、世界戦略となりうる
ような原理を規制する対策を与えることができる。

現代の社会的システムによって示された危機の入り口にあつて、
殊に社会病理学や環境の破壊のコントロールが不可能であるとい
うことによって示されているように、未来に対して二つの可能な出口
があるのみである。その一つは、社会システムが人民の大きな波や
異なった人種的集団の間の闘争によって破壊されるであろうという
こと、その二は、新しい制度的な秩序が国民や国家を基礎としない
で人民を基礎として作られた優れたレベルの組織とともに発生する
かである。その役割がエネルギーや環境を浪費し、破壊することか

ら成り立っているような浪費的社會構造 squandering social structure は、環境が再生され、進歩したそしてバランスの取れた均衡を求めるように、いまや環境を人民の手に引き戻すべきであり、人々は環境に戻るべきである。このことは、われわれが学者として農村社会学者としてまさに要求される深い意味を持った新しい挑戦なのである。

〔感謝：Ken Wilkinson のコメントと示唆に、そして Marielena Selvaggio の翻訳〔英訳〕に感謝し、本論文の序説的議論に対して我が妻 Paola Spisni に礼を述べたい。〕

(長谷川昭彦訳)
